

災害時における外国人支援について

長岡市国際交流センター「地球広場」

センター長 羽賀 友信

中国語通訳

これまでの災害と外国人支援

都市型

H7 阪神・淡路大震災

- ・「外国人地震情報センター」による多言語ホットライン
- ・「FMわいわい」による多言語コミュニティFM局の設立



中山間地型

H16 中越大震災

- ・多文化共生センターや東京外国語大学との連携による多言語情報発信
- ・長岡市による避難所巡回の実施(全国初)



局地型

H19 中越沖地震

- ・新潟県が柏崎市に「多言語支援センター」を設置
- ・全国の関係団体の協力を得て運営



海洋型
広域複合型

H23 東日本大震災

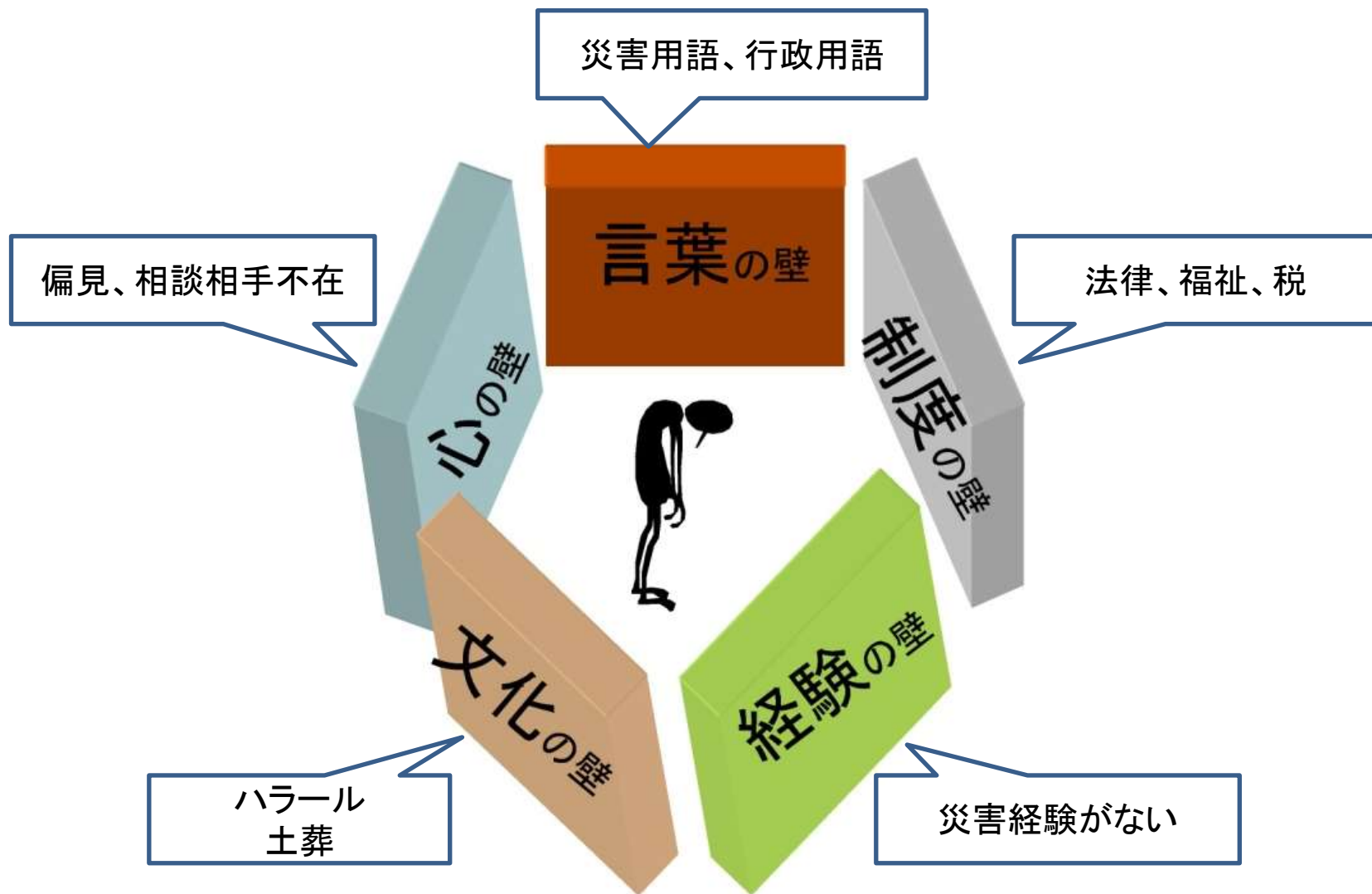
- ・滋賀、宮城、茨城の3カ所に多言語支援センターを設置
- ・「被災者とNPOをつないで支える合同プロジェクト(つなプロ)」による避難所巡回



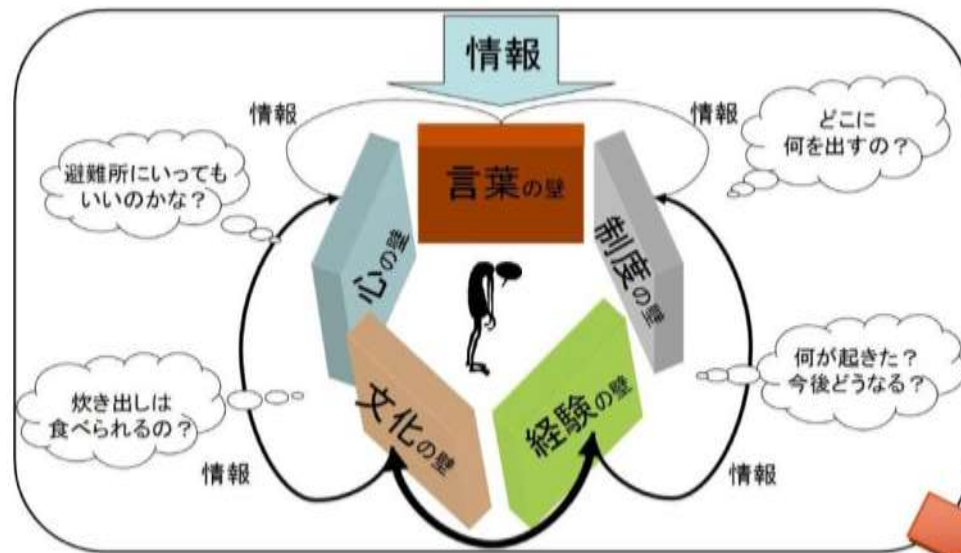
広域複合型

今後 首都直下地震、南海トラフ地震

外国人被災者の「5つの壁」



「言葉の壁」への対応が基本



外国人は**情報弱者**
まずは「言葉の壁」を壊す



「文化の壁」への対応が重要

■「文化通訳」が重要

(文化、宗教、歴史を踏まえて対応)

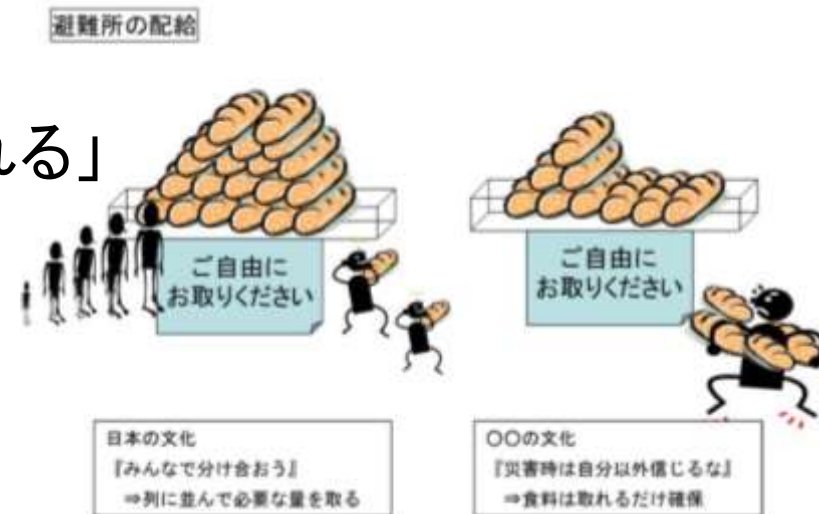
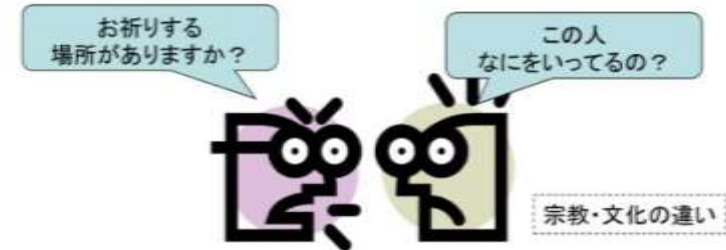


日本人と外国人のトラブル回避

例 「ご自由にお取りください」

■外国人特有の問題の例

- ・「パスポートがない」「ビザが切れる」
- ・「すぐに帰国したい」
- ・「国の家族に連絡したい」



外国人支援のポイント

■被災者に応じた支援が必要

短期滞在 → 帰国困難者支援

(旅行者など)

中長期滞在 → 言葉の支援 など

(永住者、定住者、留学生、研修生など)



■情報が無い(不安) → 情報がある(安心)

■情報の提供方法

・「やさしい日本語」・・・多言語支援の基礎

(例)避難所 → 安全でいろいろなサービスが受けられます

・ピクトグラム → 自助の補助

・SNS → 正確な情報を迅速に



多言語支援センターの活動

① 災害情報の翻訳・発信

- ・翻訳→避難所などへ掲示
- ・音訳→FM放送

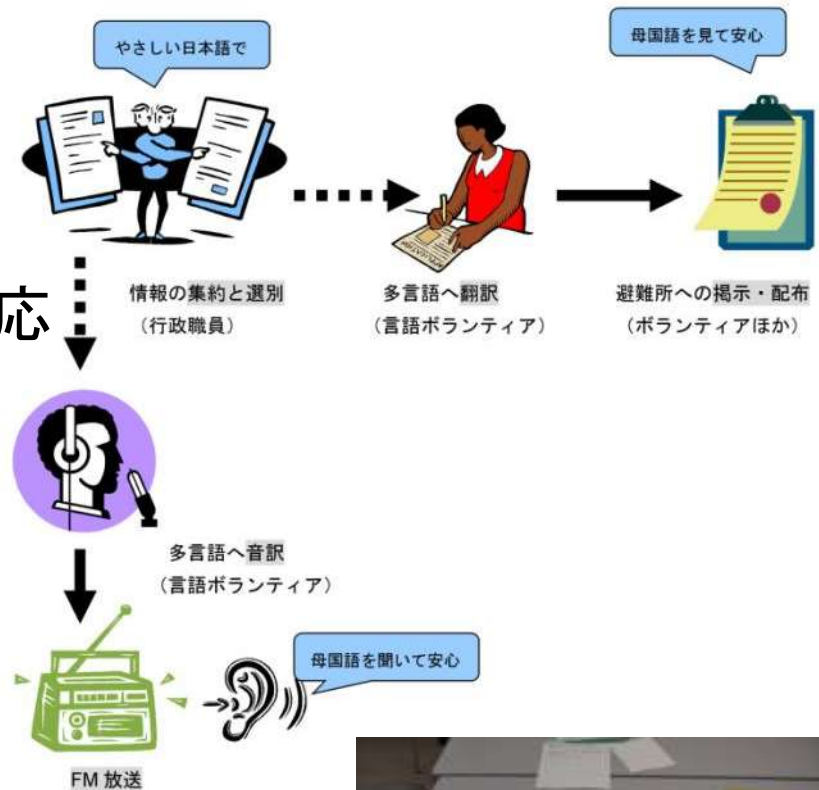
※全国の関係団体と連携して対応

② 避難所の巡回

- ・ニーズ把握・対応
- ・安心を届ける

③ 文化通訳

- ・各国で災害対応は異なる
- ・地震や避難所がない国もある



今後の課題

■ 外国人も支援の担い手

情報＋防災知識

「支援される側」 → 「支援する側」へ

→ 平時から「顔の見える関係づくり」が大切

■ 外国人コミュニティのキーパーソンとつながる

→ 安否確認、ニーズ把握、情報提供がスムーズに

■ 広域型災害への対応 — 当事者も被災者

- ・被災地の支援拠点 + 人材の全国ネットワークで補完（翻訳・音訳など）
- ・被災地に応援に行き、対応を学ぶ。被災してからでは遅い

今後の課題

■「やさしい日本語」「やさしい英語」の普及

- ・中国人・ブラジル人は、あまり英語を使わない
- ・少数言語への対応は、人的面などから不可能
- 「やさしい日本語」＝「国際語としての日本語」
- 「やさしい英語」＝英語が母語でない外国人にもわかる

■「やさしい日本語」は、平時にも役立つ

- ・生活全般において外国人の自助力を促すことにつながる
- ・日本人の子ども、高齢者も理解できる

国、都道府県、民間企業との連携の必要性

- 広域・複合災害を想定した対応
- 大使館との連携
- 外国人集住地区の対応
(大久保など)
- 宗教に対する配慮
(けがの対応、遺体の取り扱い)
- 多文化共生の推進
(多文化共生社会の形成こそ、究極の災害時外国人支援)

「協働型災害ボランティアセンター」

⇒弱者をより弱者にしない

従来のボラセン

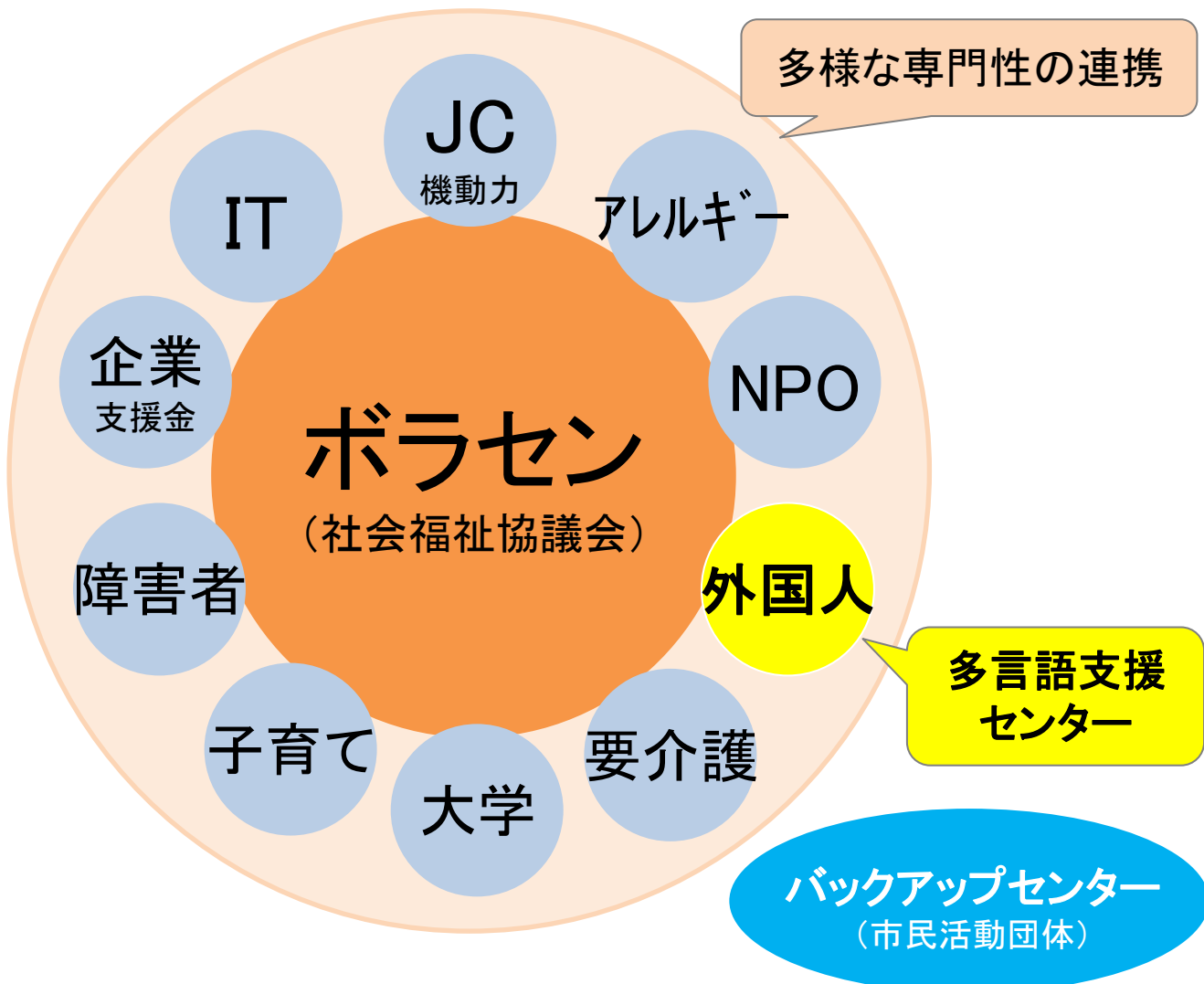
ボラセン

(社会福祉協議会)

専門性がない

多言語支援
センター

言語の専門性のみ



多様な専門性の連携

JC

機動力

IT

アレルギー

企業
支援金

NPO

ボラセン

(社会福祉協議会)

障害者

外国人

子育て

要介護

大学

多言語支援
センター

バックアップセンター
(市民活動団体)

東日本大震災 ボランティアバックアップセンター（長岡市）



ご清聴ありがとうございました